
第29回中世哲学会大会シンポジウム報告

論題：中世におけるヒューマニズム

—後 期—

司会 早稲田大学 小山宙丸

提題：イタリア・ルネサンスの

ヒューマニズム

東京学芸大学 近藤恒一

提題：ペトラルカとクザーヌスにおける

ヒューマニズム

室蘭工業大学 大出哲

提題：16世紀キリスト教ヒューマニズム

の特質

国立音楽大学 金子晴勇

(於 早稲田大学 1980. 11. 16)

(司会) 小山宙丸

「中世におけるヒューマニズム」というシンポジウムは、今回で三度目である。初回は教父時代を中心に、二度目は12・13世紀について論ぜられた。この論題は通念に対する挑戦という意味があり、少なくともこの論題が含むさまざまな意味の一つには、これまでの通念を変革しようという考えがこめられているのではないか、と思われる。もちろん、それがすぐ成功するという性質のものではないことはいうまでもないとしてもである。従来はむしろ中世とヒューマニズムとを対立的なもの、対極的なものとして考えてきた。それが次第に中世に対する考え方が変わり、近代についての考え方が変わり、それにつれて中世と近代の関係についての考え方が変わってきたというのが近年の顕著な事実であることは周知のとおりである (cf. H. Heimsoeth, *Die sechs grossen Themen der abendländischen Metaphysik und der Ausgang des Mittelalters*, 1921)。ここでこれらの問題をもう一度中世ヒューマニズムという観点で考えてみて、再検討し明らかになるものがあるならば明らかに

しようということであろう。しかし三回で中世全般の問題をカヴァーすることは、もともと無理であろう。当然問題を重点的にとらえることになる。その限りで前二回の提題者の方々は、該博な知識によって詳細に問題点を指摘された。しかし問題の展開は、依然として茨の道であったように思われる。それは初回の提題者の一人野町氏が、この方面の先駆的な仕事の一つである『中世ヒューマニズムと文芸復興』（1929年）という著作をもつジルソンの、その後の考え方をたどり、ジルソン自身の考え方がその後まっすぐに展開しなかったことにふれながら、野町氏自身が中世ヒューマニズムという視点に深く問題を感じると述べられていることにも現われている。野町氏だけではなく、もう一人の提題者の水垣氏も、意見を述べられた山村氏も、高度に専門的な知識を駆使しながら、その時代にヒューマニズムという言葉を使うことに、かなり慎重に、そして苦しげに留保をつけられているように思われる。

第二回の「12・13世紀のヒューマニズム」のシンポジウムの三氏及び意見者となると、それぞれ留保をつけながらも、かなり積極的な提言を行っておられる。それは一言でいうならば、その考え方が世の常識となっているかどうかは別として、やはりこの時期に人間の文化の一つの達成としてのヒューマニズムが、いわゆる Integral humanism として存在するというところであろう。しかしその骨格は出来上がったとしても、まだ多くの不備が残されていたこと、しかもその時期は短かく、そのいっそうの完成には向かわず、たちまち批判の時期を迎えて、多くの批判にさらされ続けたこと、などによって、ややもすれば、その時期の達成に懐疑的にならざるをえないのも事実であろう。

ヒューマニズムという言葉、従ってそういう考え方も近代のものであろう。それはむしろ過去の時代に対して、近代、現代を誇る言葉であっただろう。しかし価値観は大きく変って、今やその言葉で過去の時代を検索する。そのさい大きく変わったことは、ドウソン (*The Making of Europe*, 1934) などの考え方で代表されるように、ギリシア・ローマの古典文化とヨーロッパの間に非連続をおき、中世とルネッサンスの間は連続させるということである。従ってヨーロッパは成立以来、大きな断絶なしに一貫して成長を続けてきたということである。ヒューマニズムということで、中世とルネッサンスに断絶を認める考え方は、すでに立ち行かなくなったことを示しているだろう。けれどもギリシア・ローマ文化とヨーロッパの間に断絶

をおくということは、成立したヨーロッパがその本質的要素としてヘレニズムとヘブライズムをもっていただということを否定しない。そしてヘブライズムを旧約聖書のヘブライズムと、新約聖書のヘブライズムとに区別できるとするならば、新約聖書のヘブライズムは、自らの中にすでに本質的なものとしてヘレニズムを、従って哲学を内在させているといえるだろう。しかしこの融合の過程は単純ではないので、*credo ut intelligam* という主張と *credo quia absurdum* という主張とが共存し、あるいは交代するという形で存在してゆくことになる。いずれにしても、キリスト教は単純に哲学なしですますということとはできないのである。それ故アウグスティヌスの巨大な哲学・神学が、ひたすら人間の意志の無力さを説くという逆説的なことになるし、スコラ学の父であるアンセルムスと、哲学を攻撃したベトルス・ダミアニとが同時代人ということが起りうるのであろう。又13世紀は、聖書をもつことや、学問研究をも否定した聖フランチェスコをもっているのである。そしてそのフランシスコ会は半世紀後に、時代の最大の神学者の一人ボナヴェントゥーラを生むことになる。さらに強いていうことが許されるならば、ルネッサンスと宗教改革が同時代に起ることは考えられるであろう。

ヒューマニズムが近代の反省として考えられるようになると、ルネッサンス概念の再検討がはじまり、中世のヒューマニズムが考えられるようになる。それは一言でいうならば「神のヒューマニズム」ということだろう。しかしむしろ神とヒューマニズムとは対立概念のようなものであったとするならば、それだけ中世のヒューマニズムは検討すべき、容易に和解しがたき対立を含む多くの問題をもつというべきだろう。

今回のシンポジウムは、中世後期ということで、14・15・16世紀にわたることになり、三人の提題者をお願いした。まず近藤氏は、イタリア・ルネッサンスのヒューマニズムの本質をとりだすことに全力をあげておられる。ヒューマニズムの核をなすものは、フマニタス研究であるとして、フマニタスとは何か、すなわち「人間的」ということは何であるかをつきとめようとされる。それは人間的教養を身につけるといふことであり、人間的教養には知的、倫理的、美的、「身体的」教養があるとされる。そして人間愛を核として調和のとれた普遍的教養を十全なフマニタスと

してとりだされる。次に大出氏は、「すべての人文主義者の真の原型」とよばれているペトラルカと、「キリスト教的ヒューマニズムの当時の最大の代表者」といわれているクザーヌスとを、その両者がともに使っている *ignorantia* という言葉を手がかりに比較して、両者のヒューマニズムの異質性に到達している。ペトラルカのヒューマニズムは、無知の自覚による人間精神の尊厳の発見であり、神の愛から人間の愛への傾向が見られるという。クザーヌスのヒューマニズムは人間の形而上学的地位の高揚である。人間は人間的な神であり、この神は絶対的な神を目指して、それに無限に近づくが、それに到達することはない。ここには挑戦的な個人の尊厳の主張はない。金子氏は宗教改革者と人文主義者との対立点を、次の四つの点によって精細に考えている。1. 自由意志の定義, 2. 原罪の理解, 3. 共働説, 4. 自由。そして *dignitas hominis* を説くエラスムスと、*majestas Dei* を説くルターとをヒューマニズムの二類型とされている。

提題者の話しはたいぶ長びいたが、質問は神に嘉せられたフマニタスについてたずねた八巻氏、古典文化と、中世文化を流れるペラギウス主義の関係を問題にされた松本氏、ヒューマニズムについてクザーヌスの社会神学を考えるべきことをのべた坂本氏、エラスムスとルターの再統一の方法を模索された泉氏などによって活潑に行われた。松本氏は三回にわたった「中世におけるヒューマニズム」のシンポジウムを見通すような考え方は得られないであろうか、と提題者に求められたが、それは今後の問題としてシンポジウム参加者に課されたものであろう。

あえて三回のシンポジウムを通観することが許されるとするならば、中世の各時期、各領域の高度な専門家によって、中世におけるヒューマニズムの問題が、現在の段階で再検討されたということであろう。難問は難問であるが、巨視的・微視的に、今後生かされるかなりの成果を生んだのではあるまいか。巨視的には例えば東欧と西欧の中間点（ウィーン）にあって独得の精神史を書いたヘーアの仕事（F. Heer, *Europäische Geistesgeschichte*, 1953, 727S.）なども参考にされるのではあるまいか。
